



新型コロナウイルスワクチン

B-14

🐣 どんな病気ですか？

新型コロナウイルス感染症は、2019年にコロナウイルスの仲間新しく加わったサーズコロナウイルス2 (SARS-CoV-2) による感染症です。新型コロナウイルスに感染すると、最初は普通のかぜと同じように発熱や咳、鼻水、のどの痛みなどがでます。多くは自然に良くなりますが、病気のあるお子さんや2歳未満では、重症になることがあります。



新型コロナウイルスに感染しているかどうかを調べるには、だ液（つば）や鼻の奥をぬぐった綿棒を用い、ウイルスの遺伝子の一部を調べるPCR検査やウイルスのたんぱく質を直接調べる抗原検査があります。

🐣 ワクチンをいつ、何回、どこに接種しますか？

2024年4月現在、18歳未満のお子さんに使用できる初回接種のワクチンは4種類あります。

それぞれの接種量と接種間隔は、以下の通りです。ファイザー社の生後6か月～4歳用は、0.2mL (3 μ g) を1回目から3週間後に2回目を、2回目より8週以降に3回目を接種します。ファイザー社の5～11歳用は、0.2mL (10 μ g) を1回目から3週間後に2回目を接種します。ファイザー社の12歳以上用は、0.3mL (30 μ g) を1回目から3週間後に2回目を接種します。モデルナ社ワクチンは1種類のみで、生後6か月～11歳には、0.25mL (25 μ g) を1回目から4週間後に2回目を接種します。12歳以上は、0.5mL (50 μ g) を1回目より4週間後に接種します。

追加接種は、ファイザー社は生後6か月以上、モデルナ社は6歳以上で接種可能です。いずれも初回の最終

接種から3か月以降に、初回接種と同量を接種します。いずれのワクチンも筋肉内に接種します。

🐣 ワクチンの効果

オミクロン株流行下では、感染予防・発症予防効果の持続期間等は2～3か月程度であり、重症化予防効果は1年以上一定程度持続することに加えて、流行株に合わせたワクチンの追加接種を行うことで、追加的な重症化予防効果等が得られると報告されています。



🐣 ワクチンの副反応

ワクチン接種後の数日間、接種した場所の痛み、発熱、体のだるさ、頭痛などの症状が出る場合がありますが、これらは免疫を作る時に起きる体の自然な反応です。これまでの国内外からの報告では、そのほとんどは軽度または中等度であり回復しています。2024年現在用いられているのはオミクロン株対応1価ワクチン (XBB.1.5) ですが、これまでに使用されていた従来型1価ワクチンやオミクロン株対応2価ワクチンと安全性において同様であると評価されています。副反応の中には、心臓の筋肉や心臓を包んでいる膜に炎症が起きる心筋炎や心膜炎が、お子さんでもまれに報告されています。この副反応を起こした患者さんの多くは、2回目接種の4日以内におきています。症状は軽く、良くなっていますが、1週間程度の入院加療が必要となることがあります。接種後1週間程度は無理をしないこと、胸の痛みや息苦しさなどを認めた場合は、すみやかに医療機関を受診しましょう。

まれですが、他のワクチンと同様、アナフィラキシー（重いアレルギー反応）が見られることもありますので、接種後しばらくの間は接種場所にとどまり、気になることがあれば接種医に相談しましょう。

また、これまでに熱性けいれんを起こしたことがあるお子さんは、接種前にかかりつけの先生に、熱が出た時にどうしたらよいかを相談しておきましょう。



◆ 咳エチケットしましょう！



♥ ワクチンが接種できない人は誰ですか？



接種を受けることができない、
いわゆる接種禁忌の人

- 明らかな発熱を認めた場合
- 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな者
- ワクチンの成分によってアナフィラキシー（重いアレルギー反応）を起こしたことがある場合
- 上記以外で予防接種を行うことが不適当な場合



接種を受けるにあたって注意が必要な人
接種前にかかりつけ医によく相談しましょう

- 心臓・血管・腎臓・肝臓・血液に持病がある人、
発育に障害がある人
- これまでの予防接種で接種後2日以内に発熱や
全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を認めた人
- 過去にけいれんの既往がある人
- 過去に免疫不全の診断がなされている人
- 先天性免疫不全症の病気をもっている近親者がいる人
- ワクチンの成分によって、アレルギー反応を
起こすおそれのある人
- 血をさらさらにする薬を飲んでいる人、
血小板が少ないまたは血が止まりにくい病気のある人
(接種後の接種した場所の出血に注意が必要です)

👉 どのように感染しますか？

新型コロナウイルスは、咳や会話などで飛び散った飛沫（ひまつ）やエアロゾル（飛沫より微細な粒子）に含まれるウイルスによる飛沫・エアロゾル感染や、手などについたウイルスが口や鼻や目から入り込む接触感染によって人から人に感染が広がります。飛沫感染は、1.5～2m以上離れていれば防げますが、エアロゾルはしばらくの間空気中を漂い、より遠く（2m以上）にいる人にまで感染を広げます。感染経路を断つために、密閉・密集・密接を避け、換気を心がけ、手洗いやアルコールによる手指衛生、咳エチケットをしっかりとすることが大切です。



接触感染

皮膚やおもちゃなどに付いた
病原体に触れて吸い込むことで感染



飛沫感染

咳やくしゃみで飛び散った
病原体を吸い込んで感染

